

成果を実用化させるためのプロジェクト・マインドの必要性

NPO法人グリーンテクノバンク 産学官連携コーディネーター

八戸三千男 氏

●先行する農林水産・食品産業分野 のコーディネーター

グリーンテクノバンクとは？

NPO法人グリーンテクノバンクは、北海道農業および関連産業に従事する会員の知財形成の促進、研究成果の組織的、機動的な広報活動を通じて、地域農業とその関連産業における先端技術開発に係わる産学官連携の中核拠点として、2004年に設立された農林水産・食品産業分野の産学官連携を推進する草分け的な非営利組織である。

その活動の範囲は、農業、食品産業及びその関連産業の先端技術に関する情報の収集・提供、セミナー・シンポジウムの開催、共同研究等の情報提供、関係機関・研究者間の連携支援、起業化コンサルティング、競争的研究資金の獲得に向けた産学官連携研究の企画と支援など多岐に亘る。

スタッフは、常勤3名、非常勤3名のコーディネーターを配する小さな組織ではあるが、各コーディネーターとも、農林水産技術に携わってきたエキスパートたちからなる、北海道の農林水産・食品産業分野の強い味方である。

本稿では、連携の草創期から、組織の立上げ、組織の管理・運営、さらに産学連携コーディネーターに携わってこられた八戸三千男氏に、農林水産の現状を基盤に科学技術の視点を踏まえた産学連携推進のための考え方やそれに係るコーディネーターのあり方等について、これまでのご経験や活動実態を踏まえたお話をお伺いした。

農や食と科学技術との相違について

我が国の産業分野では、イノベーションの創出を目的にいわゆる産学官連携の推進が図られ各地でそのための活動が行われて久しい。文部科学省や経済産業省では、大学や公的なセクターが連携の推進組織となり活動が差配されているが、その一方で農林水産分野では、地域の公的な連携拠点の配置は少ないのが現状である。



八戸三千男 氏
(グリーンテクノバンク 産学官連携コーディネーター)

このような中、グリーンテクノバンクは任意の非営利組織として、地域の農林水産・食品産業分野における産学連携を進めている。

このような現状に対し、そもそも産業分野における科学技術と農林水産分野における科学技術との相違についてお話を伺った。

「産業分野における科学技術は、国主導のもと国家戦略として先端の科学技術からイノベーションを創出し、国際的な優位性を獲得することを主眼に、各地に公的なセクターや組織が設置されてきました。これに対し、農林水産分野では、先端の科学技術を活用した動きよりむしろ、農業の持続を目指した農政を支える一つの手段として科学技術が利用されてきた経緯があるように思います。

地域の生産者ニーズや消費者ニーズを勘案して農産物の品種を開発したり、育種のための技術開発を行うといった方法です。産業分野が国家戦略に基づく組織論であるのに対し、農林水産分野は先のニーズ、特に生産者のニーズにいかに対応するかというところがポイントです。

近年の農と食の連携による技術開発では、このような生産視点を基盤に技術開発により付加価値化を図るといった展開と考えられます。」

農林水産・食品産業分野における産学連携を考える場合、技術の視点としてどこを起点に考えるかが重要となる。農林水産を起点とすれば生産者ニーズをもとにした科学技術の利活用であるし、その一方で、食品産業を起点とすれば先端技術の導入や業務効率化ということになる。

引き続き、この点について現在、八戸氏が重視するスタンスと当該分野における産学連携のポイントについて伺った。

「農林水産・食品産業分野の産学連携や技術開発を考える場合、起点になるのは生産サイドであると考えられます。一般的な工業製品と違い、食品の原料は農水畜産物です。これらは生命ある素材なので、工業製品の原料とは特性が異なります。天候に左右されますし、多くは生産される時期も決まっているため通年での調達はできません。このため、特に農業分野では計画的な生産をいかにして行うかといった技術開発が行われてきたわけです。

生産を起点としてフードチェーンを俯瞰的に捉え、生産物を利活用し食品加工との連携を模索することが当該分野の連携で求められる一つのポイントです。また、その一方で生産を基盤として消費サイドの求める質の研究に対してもフォローアップが必要となります。原料となる生産物の高度化なくして、その先の産業との連携を図ることはできませんから。

その意味で考えれば、当該分野の産学連携は生産をよく理解した上で全体のフローを見なければならぬということになります。」

生産を起点としたコーディネートのポイント

続いて、生産を起点とし全体のフローを俯瞰的にみるコーディネートにおいて、特に重視することについてお話を伺った。

「生産を起点として、そこから食品産業、流通、販売などの事業化やそのための技術開発等を考え

た場合、やはり大きな影響力があるのは「品種」だと思います。生産者のニーズの多くは、生産性の高い品種、おいしい品種、病気に強い品種などです。これらが満たされることで原料としての生産品の価格も上がりますし、加工適性に優れた品種であれば、製造サイドとの連携も効果的に構築することができます。

農林水産分野をずっと見てきて思うのは、連携による技術開発や商品開発ができたとしても、生産サイドは依然として原料提供者に留まり何も変わっていないということです。

過去にも多くの連携による成功事例がありますが、生産サイドの価値を向上させない限り本来の意味での成果や波及効果が出たとは言えません。地域の生産物の価値を高め、生産を持続させてこそ、我が国の農林水産業が活性化するし、維持が可能となります。ポイントはいかに生産物を付加価値あるものにするかということです。

もう一点重視していることは、生産者のニーズを常に把握するということです。よくある話ですが、農業系の機関で研究されているシーズが生産者のニーズとマッチしていないということがあります。連携の中核組織のコーディネーターであれば、このようなミスマッチを少なくするために、生産者のニーズ（この場合、上記の「品種」とも繋がる）に気を配ることが求められます。

グリーンテクノバンクでは、会員に生産者や生産者団体がいたり、その他6次産業化の動きや様々な情報を把握するための情報網を持っています。日々のコーディネート活動にこの情報源は大いに役立っていますよ。」

生産者ニーズを注視しつつ、その答えの一つである情報の把握を行い生産基盤に立脚した先端技術との連携を図るといった、まさに地域の中核拠点としての活動が行われているといえる。



「2011アグリビジネス創出フェア in Hokkaido」では来場者2,800名。多くの展示ブースに農業・食品分野の最新技術を展示し交流（H23.12/9-10 サッポロファクトリー）



「平成23年度ソバセミナー」では、参加者120名が、道産そば安定生産のための最新技術情報とそば産業の振興策について検討（H23.10.13 旭川市）

次に、地域の生産物の価値を高め、生産を持続させるには、実際にどのような手段や方法が考えられるのか。この点について質問を行った。

「生産段階をベースで考えれば先ほどお話しした”品種の開発“が重要ですが、これは既に多くの場所で研究が推進され、その成果が各方面で事業化されています。

農林水産省では現在6次産業化といった施策を展開していますが、この視点はもともと生産の現場にあったものです。例えば、私たちも取り組んできましたが、地域にあるエネルギーやバイオマスの利活用、循環型農業など、生産を地域の土地や環境といったポテンシャルで捉えるとまだまだ価値を高めるための技術開発シーズが眠っていると思われま

す。既存のフードチェーンにある生産から製造、流通、小売、消費に至る流れに加え、地域には異分野や異業種の技術などとの連携による価値創出の可能性があるので

す。成果を見据えてそれぞれが効果的に連携し、全体を見据えた中で展開してゆく発想が求められるわけ

です。今回のレポートのまとめとして、プロジェクトマインドをもったコーディネーターの役割と人物像についてお話を伺った。

「プロジェクトマインドで連携を差配するコーディネーターに求められる発想は、現在推進されている6次産業化とイノベーションをいかに連携させて考えてゆくかということにも関係すると思います。そのためには、生産技術で培われた成果を事業化してゆくためのスキルとノウハウを身に着けていることが重要

です。このような人材は、そもそも農業現場や生産技術に関する知識を持っている必要があります。工業分野に見られる企業ノウハウを駆使したコーディネートでは少々難しいのではないかと考えられます。地域の農業研究機関などの研究者の中から、プロジェクトマインドをもった広い視野のある人材を発掘し、そのうえでコーディネートに必要なノウハウやスキルを身に着けていただき、農林水産・食品産業分野のコーディネーターとして活躍していただくことを大いに期待

します。そのためには、これまでの技術や研究分野では知ることのできないコーディネーターとしての教育も重要になると考えま

す。大きな視点でプロジェクトマインドを磨くための教育です。」

◇ ◇ ◇

（文：長谷川潤一（社）農林水産・食品産業技術振興協会）